『國民新報』1940年10月13日

[主張]　街頭の訓練

　七の、のをで[も]してほしいものだ。、、で[ば]かり、やつていゝといふのものでなくて、たるもの、なるにあつてもずこれをすべきである。しかるににいてこれがはれぬとはにないことゝいはねばならぬ[。]『にて』とはなるにあつてもといふことである。

の七のサイレンがりめたらにてはすにばず、にいてもは、はしていてゐたものも、一にぴたりとまろう[、]そしてにひつり、のをじたてまつり、のをにきたてまつりつゝしやう、サイレンがんでからをけやう。、はまるにもくまいが、、は一にすべきである。、などではに、これがされてゐるさうである。にいてされぬがにあるだらうか。一にの一をす。やだけでがはなければにもならないばかりでなく、てにをふことゝなる。であるからか一つめたら、にすべきだ。七とのにける一などはにそのとすべきであらう。

にやのためからのがにりむのであるが、このこそかゝる練のをすのだとおもふ。それがとしては、そののの、、、四、、十、、、そののなど、だかりのいに、七とのにをし、をり、メガホーンにて、

『七のサイレンであります。どなたもにひたてまつり！』

とか、

『のサイレンであります。どなたものと靈のためにの』

とばはるやうにすればい。それはにかにもしくぐましいのであらう。

　一はすぎるといふ人もあるが、そんなことはない。わづか一日二である。一をしたてまつり、一のためにることはすぎこそすれ、すぎるなどいふべきではない。